

## 詩誌「感情」とその周辺(一)

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 1983-03-01 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 飛高, 隆夫 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://otsuma.repo.nii.ac.jp/records/1606">https://otsuma.repo.nii.ac.jp/records/1606</a>

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



## 詩誌「感情」とその周辺 (一)

飛 高 隆 夫

### 「感情」とそのグループ

詩誌「感情」は大正五年六月に創刊され、大正八年一月に全三冊をもって終刊した。室生照道(犀星)を編集兼発行人として、犀星、萩原朔太郎の二人雑誌として出発したが、第五号頃から山村暮鳥、竹村俊郎、多田不二、それに表紙及び版画を發表した恩地孝四郎らが準同人格で活躍し、このほか、小松柳吉、今東光、瀬田弥太郎、相川俊孝らの詩が掲載された。いわゆる「感情」グループの形成については、伊藤信吉氏の『「感情」グループについて』(近代文芸復刻叢刊「感情」別冊解題、冬至書房新社、昭五四・七)に詳しいので、それにゆずることにして、一つだけ補っておきたい。それは、暮鳥の不参加の問題である。

山村暮鳥といえは、朔太郎、犀星とともに、人魚詩社を結成し、「卓上噴水」(大四・三〇五、全三号)を刊行した仲である。「感情」創刊に際して、なぜ暮鳥が招かれなかったかの理由を、朔太郎の、次の二通の書簡が明かしている。一通は、大正五年一月中旬(推定)の高橋元吉宛のもので、「山村といふ人は私にとつては疑問の人です。『だんす』のやうなものを書く所は敬服するが、どうも人格がはつきりしない、どこかに詩人ぶつた気どりがあつて不徹底な人のやうに思ふ。」とある。もう一通は、大正六年二月一四日付の白鳥省吾宛のものである、当時、朔太郎と白鳥省吾は、朔太郎

が暮鳥の詩を解説した「日本に於ける未来派の詩とその解説」〔感情〕第5号、大五・一一）をめぐって雑誌や新聞、さらに私信によって応酬していた。これはその中の一通で、「私は最も正確に彼の芸術の核心を把むことができました。同時に私には、そのスヒンクスの実価が解りすぎるほど鮮明に分りました。／＼その結果、私は一面、その珍らしい芸術に充分な独創的光輝を認識すると同時に、一面、極力それを排斥しなければならなくなつたのです」と自分の立場を記したあと、次のように説明している。少し長くなるが、引用しておきたい。

それを賞讃する理由は、その全く世界の類のない（たしかに類のないものである）独創と、その驚くべき感受性です。殊に日本の読書界が、この氣韻を会得しないで全く見当ちがひの見方をしてゐることは私をいら、いら、させました。そしてそれを排斥する理由は、かうした態度があまりに人間の生活と交差のない遊戯的な者であるからです。単に「美」といふ評価の上からいふならば、そうした芸術も許すことができる。併し私は人間としての感情の純真を伴はないそうした卓上芸術を自分の信念の上から断じて許すことができない。私と室生とが山村君から別れて「感情」を出したのは実に、この反感に基因したものであつた。私共は一面彼の天童を認めると同時にその態度に対して抗議をもちこんだのです。

「感情」創刊号 その(一)

——「虹を追ふひと」(一)——

「感情」第一号は、第一表紙を除き本文三〇ページ半のうち二九ページが、朔太郎の対話詩「虹を追ふひと」によって占められている。

「虹を追ふ人」について、朔太郎は、大正五年五月末と推定されている高橋元吉宛書簡（一五二）に、「此の戯曲体感想の創作の動機をいちばんさきに御話したのは兄でした、而していちばん「虹を追ふひと」に深い友情を示されたのも兄で

した。／それ故、校正ずみの雑誌を第一番に御送りします、是非読後の御感想なり批評なりをおきかせ載ぎたいと念じて居ります」と書き送っている。そして、同年六月初と推定されている元吉宛書簡（一五三）では、元吉の批評に対する感謝を記したあと、「あの詩、全篇の中で私がいちばん感動して情感的になって居た所は、第三篇の始皇帝の死についての王朔方の心もちをかくときでした。もちろん御推察でせうが、あの王朔方はとりも直さず作者の私自身の心です、そして始皇帝も矢張私自身の弱々しい心の一部に外ならないのです。だから王朔方が始皇帝によせた同情は、必竟私が私自身によせる喟嘆だったのです」「天にも地にも王朔方といふただ一人きりの理解者とその涙とを得た不幸な皇帝はあの瞬間にもう死んでもよかったです、苦しい、苦しい救ひが求められたのです」と、作意を説明し、また、「あの詩の全篇を今から考へると、第一篇は少年時代のロマンチックで、ただあてもない一種の本能にきざしたあこがれの旅であり、第二篇は青年時代の懷疑思想にくるしむ煩悶の道程、そして第三篇が「救ひ」の片影を認めた成年時代であるとも解されません。実際篇中の人物もそれだけの年月を旅に費して居ることになつて居ます、而してそれが私の三十年間の思想の行程を象徴して居るのです」との感慨を付しており、この書簡は、さらに、「実に人心から人心へ電流のやうに感流する不可思議な物象」であるところの「リズムといふものゝ神秘性」への感動を語り、「私は感傷といふ言葉をよく主張しますが実際、宗教でも詩でもその核心の生命は必竟「畢竟」感傷にすぎないと思ひます、センチメンタルほど貴重なものは此の世界にない筈だとさへ思つて居ります」と信念を披瀝し、ドストエフスキーへの感動を語り、また、推定四月の北原白秋、前田夕暮、元吉等に宛てた書簡で述べた、「私の神を発見した（発見といふよりは神の手にふれるといふ方が正しい）」「**「新世」**のよろこび」が、実は「一種の幻影」に過ぎなかつたことを告白している。「私はやつぱりもの通りの私です、救はれるどころか一層苦しい地獄に居るのです、／そしてやつぱり「虹を追ふ人」の旅をつゞけて居るのです。」「私の今歩いて居る道は「感情」に至るまでの一本道です、理智と感情の出会い終局点です」——「虹を追ふ人」だけでなく、「感情」創刊時の朔太郎の精神状況をよく知らせる書簡である。

## 「感情」創刊号 その(二)

——創刊の周辺、誌名の由来——

巻末の「感情のために」において、朔太郎は「虹を追ふ人」を書きあげた喜びを語り、また、「……私は感情のために生きて居る人間である。いつはり多き世の中に苦しいことも楽しいこともただ此の平凡な感情ばかりが私ひとりの真理であり生命である」と強く主張している。犀星は「編輯の後に」(室生照道の署名)において、まず、「萩原は一年間書かず通信をせむに暮したそのあひだに虹を追ふひとが生れた。／偶然に萩原と私との間にうすくても永く続く雑誌がほして話が出た。尚慌しい電車の中や喫茶店でも、くろみをやつてゐる中に、もう此の(感情)が生れた。／そして萩原は前橋へかへつた。」と、「感情」の成立について触れている。朔太郎が上京して、犀星と数度会つたことはわかるが、上京の詳細は不明である。筑摩書房版全集の年譜には、「5月上京。室生犀星と『感情』発刊について相談(推定)。」とある。書簡を見ると、四月十二日付木下謙一宛はがきに、「東京の春がまちどうしいです、桜のさく頃は是非とも上京したいと思ひます。」とある。続く書簡(一四六)は白秋宛のもので、四月二二日の日付で、例の新生の喜びを「今はほんとの真如に入りました。」と告げている。以下、前田夕暮、高橋元吉への書簡が続き、特に元吉とは数度の書簡の往復(少くとも四度)が見られ、四月末の上京は考えられない。そして、五月十六日付の竹村俊郎宛封書(一五一)に「同君(犀星―註)とはどうなつて居ますか。私の方で雑誌の経費を毎月二十円づゝ出すことになつたから、それで多少の方便はつくと思ふ。併し兄はやつぱり一人で音楽をやつて居た方がいゝ、音楽の方の友人と交際を求めなさい。」とある。これにより、朔太郎の上京は、新生の喜びの興奮のおさまつた五月上旬から中旬のはじめにかけてであり、その時、竹村俊郎が、雑誌の費用の一部負担を条件に、「感情」への加入を希望したことが推定できる。また、「感情」発行の費用については、朔太郎の六月一八日付竹村俊郎宛封書(一五五)に、「先日は金をありがたう、すぐに御礼を出す筈でそのまゝになつてゐる、すみ

ません、あの中、五円だけは是非御返しをしなければならぬのだが、ことによると「感情」の費用が不足するので、しばらく拝借しなければなりません、実に言ひにくいことだが仕方がない、何しろあの雑誌の経費を私一人の手で出すのだから実にくるしい」とあり、朔太郎が一人で背負っていたことが推定される。

朔太郎の「編輯記事」に続いて、犀星は、「善い感情を求め、そのものに善い心を与へることは愉快だ。そのものの実することは最つと愉快なことだ。私はこの小さなものがどんだん育つてゆくことを祈つてゐる。」と、犀星なりに、「感情」という誌名への意味づけを行っている。犀星の、この「感情」を「善い感情」に限定して把握している点は、彼が『愛の詩集』の世界へ大きく踏みこんでいることを示すとともに、朔太郎が元吉宛書簡（一五三、推定六月初）において、「室生は小生をよく知つて居るけれども、小生の思想に対しては全く無智です」、「あの男は純粹の叙情詩人として生れた人間ですから、私以上の純感傷派です、私の憧憬するものをあの男は感得して居る、そういふ点で彼は私よりもすぐれた人間です、」と記している、朔太郎の犀星への不満と「崇敬」とをよく示すものといえる。

付記 「感情」という誌名は、朔太郎の詩史への理解、それに発する自己の立場の主張、さらにその主張の客観的評価等を含めて理解しなければならぬものであるが、今はそれに触れない。

### 『愛の詩集』刊行の事情

犀星の『愛の詩集』は、大正七年一月に刊行された。犀星は、『愛の詩集』の刊行について語る時は、養父室生真乗の死によって多少のまとまったものが手に入ったので、処女詩集を出すことにした、と語るのが常であった（『自叙伝』『私の履歴書』その他）。現に、「感情」の復刻に際して書かれた『感情』のことなどにも、「大正六年の九月に父が死に、自分は少しばかりの遺産を貰うた。自分はこの金で詩集を出すことを考へ、萩原に話したが萩原は五十円自分に出してくれ、竹村は五十冊買うてくれることになり、自分は多田不二にその印刷や経済を相談の上、仕事に着手するのであつた」

と記している。

しかし、現実には、真乗の死は大正六年一〇月二二日であるが（右の大正六年九月は誤り）、それよりはるかに早く、『感情』第6号（大六・一）の「詩界消息」に、犀星は、朔太郎の『月に吠える』刊行の予告をはじめとするいくつかの記事の最後に、「室生犀星の詩集」と題して、「単行本として著述一冊もなきは当今の詩壇にあつては私ひとりのみである。感情第二号の抒情小曲集を私の詩集とするには余りにさびしい。／＼苦しい性情の時代を併せて発売禁止になつた詩篇を題して『愛の詩集』として二月終りには自費で感情詩社から出す」と予告している。『月に吠える』は予定どおり二月に刊行されたが、『愛の詩集』は遅れ、ようやく「感情」第13号（大正六・九）の「編輯記事」に、「僕の第一詩集『愛の詩集』は質素で堅牢な重い本にしたいと苦心してゐる」とあり、裏表紙に広告が掲載され、刊行の近づいたことが知られる。『愛の詩集』刊行の遅れが、犀星の経済的事情にあることは、容易に察せられる。犀星が朔太郎や竹村俊郎の経済的援助を受けたことは前掲の犀星の一文によつてもわかるが、朔太郎の次の竹村俊郎あての書簡（大正六・一二・一〇）は、その間の事情を語るとともに、朔太郎の犀星に対する友情の深さをしのばせるものである。親がかりの身の上であつた朔太郎にとつて、経済的援助は実に苦しいことであつたことも察せられる。ちなみに、竹村俊郎は、山形県の大地主であつた。

室生はいよいよ詩集を出す。これに就いて僕が言ひ知れぬ苦悩を味つてゐることは、兄は推察してゐるでせう。すべてのことは物質上の問題だ。／＼室生から兄にたのんだことは、ずいぶんひどく兄を悩ました問題であつたらうと思ふ。私はそれについて、兄の苦悩の最もよき理解者であるかも知れない。／＼併し、今度だけは是非かれのために尽してやつてくれ給へ、これは私からも頭をさげてお願ひ致します。「今度だけ」私は特にそう言ひます。今度だけ後は責任がない。今、彼を救はないことは我々の過去の彼に対する厚意のすべてを取消してしまふやうなものです。兄にしる僕にしる、ずいぶん迷惑千萬なことではあるが、併しそれだけの報酬は、室生の生涯を通じて記念さるべき

ことです。／是非、お願い致します。彼に返事をやつて下さい。

結局、『愛の詩集』の刊行については、おそらく朔太郎の『月に吠える』の刊行（準備）に刺激されて犀星も刊行を決意したが、経済的事情から頓座しかかり、朔太郎と竹村俊郎の援助の約束を得て立ち直り、あるいは養父真乘の遺産によってその時期が早められたかも知れない、という事情が推定できる。しかし、犀星は、それを養父の遺産のおかげと思いたかつたのではないか、と思うのである。

なお、右の事情と関連して、『愛の詩集』発売元の文武堂から、『新しい詩とその作り方』の執筆が、発売元を引き受ける条件として出されたのではないかと思われる。

#### 犀星の『新しい詩とその作り方』

第一七号（第三年第二号、大正七・二・一）の犀星の「編輯記事」の中に、「去年十二月から本屋から頼まれて「新しい詩とその作り方」を一月の元旦から書いてゐた。自分には不適當な仕事だったが、とうとう今日までに二百枚ばかり書き上げた。」「僕は今月は本の方の仕事で、詩も書けなかつた。」とある。裏表紙には、『愛の詩集』と並んで、その広告が出ている。発売所はともに文武堂であり、この書の執筆が、先に記したように、文武堂が『愛の詩集』の発売元となる条件であったことが推定できる。「この本は詩についていろいろな感想や作法や評釈やを集めたもので読者はこれを手にするとしたらいろいろな美しいあどけない物語りに出会したり、詩といふものを根本的に知ることが出来ることと信じる。」（傍点付加）とある。続く第一八号の「編輯記事」にも、「「新しい詩とその作り方」は、今月の末頃に文武堂から出る。たいへんいやなタイトルであるけれど、中身の部分部分にはよいところがあるやうに思ふ。一読してほしいと思つてゐる。恩地が装幀してくれた。」とあり、第十九号の「編輯記事」にも、「僕の「詩の作り方」はたいへん刷りがわるくて不快だつた。しかし清楚な本として、僕のものとして読んで貰ひたいと思つてゐる。」とある。第二〇号の「編輯



記事」には、今度は竹村俊郎が書いている。「新しい詩とその作り方」は非常にやさしく、丁寧に書かれたものである。ほとんど詩に対する人人にとつては美しいお伽噺たることを疑はぬ。「いまは詩の作法として従来のやうに型に填つたものでは説明が出来ない。著者が「あらゆる芸術製作上に於て、凡てが教へることでない」といふてゐるやうに、詩の作法と題して具体的に文字に填め込むことは不可能である。それで、丁度詩作に対する感想集とも言ひたいこの本はたいへんよいことを齎すことと信じる。それはあたかも有名なる画家の日記の如きものだ。すべては理屈では解らぬ。指先で触れるやうに暗示さるることだ。(究極の暗示は膚でかんじることが出来る)」「この書は殆んど全部、こう言ふ風な行き方である。「詩を思ふ心」に表はされた、稚い十才ばかりの女の子の物語などはこれ一つでもこう言ふ種類の本として立派なものであると思ふ。」と書いている。この竹村の評言は適切である。

その、「新しい詩とその作り方」は大正七年四月一〇日、文武堂書店より発行された。犀星にとつては第二著作集である。装幀が恩地孝四郎、扉絵広川松五郎、序が朔太郎、それに先程引用した竹村俊郎の推薦と、「感情」こぞつての後押しである。「著者のよき友人なる」と自ら記した朔太郎の「序に代へて」の冒頭、「室生の書いたこの書物は、たいへんよい書物だと思ふ。／何故かといふに、日本の詩壇は今漸く自覚しやうとしかかつてくるのだ。／すべてのよいものや、美しいものや、力のあるものは「これから 生れてくるのだ。／ここで室生の集めた詩は「これまで」の詩なのであらう。併し一面からみると、それは実に「これまで」と「これから」との中間なのだ。／それ故、先づこの辺からぼつぼつ「詩の芽生」らしいものが見えてくるかも知れないのだ。」は、朔太郎の時代に対する自負をうかがわせる。

また、犀星は「自序」に、「この本をすつかり読んでくれた人々は、たしかに『詩』といふもの、『詩』の、『何者であるかといふこと、『詩』を感じることに『詩』の製作の困難であること、『詩』を書くまでに心を錬磨すべきこと、『詩』が決して遊戯でないこと、あくまで第二生命感であること、正しい自然の現はれてあること、その他を明らかに感じることに信ずる」といいながら、詩は教へることはできない、として、「ただ一つ『理解』することのみが、『詩』の製作者に

とつて必要であるごとく、この本を読む人人も、この本の中にある『充ちあふれた精神の根ざすところさへ』見てもらへれば、著者の望みは足りる」(傍点原文)といい、「本書」は「極めて自由に、しかも最も本能的な正確さをもつて、ぐいぐいと書いて行つたもので、彼の忌むべき『形式』や『系統』の総てを超越してゐることをうれしく感じる」と記しているように、詩についての感想、自作解説、名詩鑑賞がその主たる内容になっている。この書は、現在のところ全集に収録されていないので、その内容を理解する一助のために、目次をうつしておくことにする。

(1) 詩は優しい春のやうな感情である

(詩の本質、精神の籠つた仕事)

(2) 詩は愛である

(愛あるもの、街や郊外)

(3) 一つの林檎

(林檎をどう詩にかくか、いろや匂ひ、深さ)

(4) 陰影、容積、深み、動くものについて

(作品の背景について)

(5) 新鮮なるものに就て、新しい詩について

(新しい詩とは何か)

(6) 詩は自然の中に

(正しいもの、自然の凡ては詩の世界だ)

(7) 自由な詩、自由な口語

(七五調について、口語詩の内容について、詩の自由について)

(8) 唱歌をうたふ女童の心理について

(歌詞の自由をとり入れよ、美しい女童らのピアノを喜ぶ詩のやうな心)

(9) 真と美とは詩の根本思想だ(その一)

(詩によつて挙げられる美について)

(10) 真と美とは詩の根本思想だ(その二)

(真はいつはならない感情だ、詩は正直にかけ)

(11) 男性的な詩と女性的な詩(その一)

(12) 男性的な詩と女性的な詩(その二)

(大地に根を持つた詩、いつはらずに書れた詩)

(オオゲストラのやうな詩、深大な詩)

(13) 詩と宗教について

(詩は一つの心の宗教である、善い人間に善い詩が生れる。)

(14) 近代科学と詩と

(建築、街路、飛行機、並木、文明の山、文明の野、マリネツテイの詩など)

(15) 口語詩と文語詩との区別

(日常語について、生きてる言葉について、白秋、萩原氏の詩)

(16) リズムとは何ぞや

(リズムの根ざすところ、精神の音楽、音楽の中の言葉、ヴォルレーヌの詩、ウイーバーの詩)

(17) 恋及び愛の詩

(人類の愛について、愛の詩の精神について、萩原氏の詩、高村氏の詩、福士氏の詩)

(8) 詩を思ふ心

(詩を思ふ心ほど良い精神はない、私が初めて詩をかいたころ、幼年の頃、悲しい思ひ出のころ)

(9) 詩と生命感に就て

(詩についての信条、未来の悩み)

(20) 詩のやうな物語

(可憐な少女ボンタンに就いて)

(21) 美しい詩とその評釈

(上田敏氏、山村暮鳥氏、北原白秋氏、室生犀星氏、萩原朔太郎氏、アンリイ・ド・レニエ、リヒヤルト・デエメル、クラブント、モオリス・マアテルリンク、バリモント、ニイチエ、ボドレエル)

(22) 詩を多く書くこと

(一つよりも二つに、二つの生命について)

(23) 叙情詩について

(24) 詩人と郷土との関係について

(25) 詩と音律との関係について

「自序」において、犀星は、「自分も実力によつてこの本を日夜に亘つてかき上げた」といっているが、犀星の全力投球ぶりは、右の目次によつても、うかがわれるであろう。右のうち、「(20) 詩のやうな物語」は、副題からも理解できるように、犀星の小説の第三作「或る少女の死まで」(「中央公論」大正八・一一)の根幹をなすエピソードを語ったものである。また、犀星の全力投球の姿勢がうかがわれる、といったが、「(21) 美しい詩とその評釈」のうち、ニイチエ、ボドレ

ールの項は、文体、及び内容から見て、到底、犀星の執筆とは思えない。他の詩についても、誰かが書き、犀星がそれに筆を加えたのではないか、という印象が濃い。この誰かについては、当時、東京帝大独文科在学中の多田不二であろうと推定する。また、23章以下の三章も多田不二の執筆であろう。前述のように、内容、文体の相違に加えて、解説、引用等が、ほとんどドイツ文学一色であることも、右の推定の根拠となし得ると思う。

犀星は、『感情』のことなど（前出）において、

「愛の詩集」は五日間位で売り切れ、晩酌の機嫌のよい文武堂は、未だ払ふ金があるが来月だといふのであつた。

その上彼は益々上機嫌だつた。／『何か一冊書いていただきますかね』／併し其後彼は決して此の『何か一冊』の本のことは、話し出さなかつたばかりか、時とすると不機嫌で空返事ばかりしてゐた。自分は金を取りに行きながら彼のの不機嫌に辟易して話し出さなかつた。

と記している。この「何か一冊」が、この『新しい詩の作り方』であつたはずである。しかも、現実には詩集刊行以前に、文武堂が発売元となることを承知した時点で、この書の執筆の依頼がなされたであろうことは、先に確認したとおりである。犀星にとっては、全力投球はしたものの、本来、心の進まぬ仕事であつたのであり、しかも、他人の筆を借りる結果となつている。犀星にとっては、ほとんど唯一の詩論集といえるこの書を、あるいは、自己の著作目録から抹消したい思ひがあつたのではないであらうか。右に引用した『感情』のことなどはそのことを裏付けるように思える。その一つの理由として、先に述べた、犀星が自分の処女詩集を、あくまで養父の遺産によるものと思ひこみたかたではないか、という推定をあげておきたい。

なお、本書の中で注目すべきものの一つに、犀星の「小景異情」の前半の自解がある。犀星は「幼美しい詩とその評釈」の章において、

ふるさとは

とほきにありておもふもの

そしてかなしく うたふもの

よしや うらぶれて異土のこじきこじきになるとも

かへるところにあるまじや

かへるところにあるまじや

を掲げて、次のように自解している。

この作は、私が都にゐて、ときをり窓のところに佇つて街の騒音をききながら「美しい懐かしい故郷」を考へてうたつた詩である。／だれでも都会に住む人人らは時をり私のやうに悲しげな目付をして故郷の温かい山河を想起して、そこに曾て営んだ平和な生活を胸に浮ばせるであらう。自分の家の庭や、庭の木や、幼少のをりに遊んだ草場や公園や夕暮の町の有様や、さては、楽しいげな善良な自分らを愛してくれた親密な人人やを心に描いて、何一つ身に親しまない「旅」にあるやうな慌しく加之も冷たい都会を悲しく思ふであらう。いつの世も故郷は吾吾の胸に緑緑あをあをとして燃えたり煙つたりしてゐる。夜はゆめ、にまで親密な山河に遊ぶことさへ願ふのは、人として為なければならない「感情の慰さめ」である。しかし自分は帰りたくない。自分は強大な生きた姿で此都会にありたい。自分が見搾らしく、し、乞食となつてもかへつてはならない。／まこと故郷はただ遠方にあつて思慕するところである。かへつては最つと寂しく悲しいことが多いことだらう。自分はやはり此の都会にゐたい——大意はこの心持を体したものである。

この「小景異情」その二は、大凡の解釈や鑑賞において、望郷の情を中心に考えられている。右の自解は、その前半のみについでたものではあるといえ、その望郷の情を越え、「強大な生きた姿で都会にありたい」という意志を強く主張したもので、従来の（この自解をとりこんでいないと思われる）解釈や鑑賞に、再考を促すものといえるであらう。たしかに作品は、作者の手を離れた時から一人歩きをはじめたものであり、読者による、いかなる解釈や鑑賞にもたえなければ

ならないものであろう。また、この詩を含む「小景異情」は、初出の「朱欒」(大正一・四)、再出の「感情」(大正五・七、第2号)、さらに『抒情小曲集』収録時と、その構成を変えている。構成上の位置によって、その意味、内容に微妙な変化を生じてくるのも確かである。このような事も意識の中に置きながら、「小景異情」その二については、後考を期したい。

なお、右の自解については、次のようなことも考えられる。朔太郎が「室生犀星の詩」(『日本』昭和一七・四〇五)において、この詩を「年少時代の作者が、都会に零落放浪して居た頃の作である」としたのは、いかにも朔太郎らしい独断として、よく知られている。しかし、ここにこの自解がある以上、朔太郎の解釈にこれが響いている、という見方は否定しにくいものとなるであろう。もう一つは、「いつの世も故郷は吾吾の胸に緑緑として燃えたり煙つたりしてゐる」という一文である。これは確かに、犀星自身の感慨であろう。しかし、あるいはここに、石川啄木の「やはらかに柳あをめる／北上の岸辺目に見ゆ／泣けとごとくに」等の望郷歌の響きを聞くことは許されないであろうか。朔太郎における啄木の影響は詳細に吟味されているが、犀星と啄木とのそれは殆ど等閑に付されている。あるいはこのあたりに、この二人の間をつなぐ端緒を見出すことができるのではないであろうか。この点についても、後考を期したい。

### 現代詩人号

第4号(大正五年九月)は「現代詩人号」とし、北原白秋「鴉」、三木露風「夕の合奏」高村光太郎「我家」、福士幸次郎「獵師」、水野盈太郎(葉舟)「詩二篇——盗む勿れ、祈り」、白鳥省吾「海を恋して——海を恋して、鈴懸の樹、青草」、日夏耿之介「少人だちに与ふるうた」、川路柳虹「にがき盆五章——わが暗き日の思ひ出——」、加藤介春「ぬかるみ」、山村暮鳥「蚤—蚤、岬の上にて」、萩原朔太郎「孤独——孤独、白い共同椅子」、室生犀星「永遠にやつて来ない女性」を収めている。「消息」で犀星は、寄稿者への感謝を述べるとともに、「私どもの熱心によつて為されたとは云へ殆んど日

本の詩壇でこれだけの美しい団欒をしたことが始めてである。これからも求められないかもしれない」と自讃している。この執筆メンバーを見ると、注目すべきことが二つある。

一つは、高村光太郎の発表である。光太郎は、大正三年十月、詩集『道程』を刊行後、大正四年には、「ローマ字」一月号に「FUUYU GAKITA」(「冬が来た」)の再録があるのみで、大正五年九月発表のこの「我家」は、『道程』以後はじめての発表である。続く詩の発表が、翌大正六年一月の「感情」第6号の「花のひらくやうに外五篇」であることを考えると、光太郎の詩人生における「感情」の占める位置は軽視できない。光太郎は、大正六年には、他に、「無為の白日」「猫」を「詩歌」一月号に発表した外、「小娘」(「奇麗にお化粧した」)(ともに発表誌、発表年月不明)のみであり、大正七、八年には詩の発表はなく、大正九年に至って、「序曲の前詞」(のち「序曲」、発表誌不明、二月)、「メロン」(「時事」七月)、「丸善工場の女工達」(「時事」九月)が発表され、大正十年、「明星」が復刊されるに及んで、「雨にうたるるカテドラル」(「明星」十月)をはじめとする第二期の詩作が続々発表されはじめるのである。

結婚後の光太郎は、彫刻の制作に打ち込み、また、おそらく経済上の理由もあったのであろうが、翻訳や散文の執筆に力をそそいでいる。大正四年には『印象主義の思想と芸術』を天弦堂書店より近代思想叢書第五巻として刊行し、大正五年十一月には訳編『ロダンの言葉』を阿蘭陀書房より上梓している。智恵子は湿性肋膜炎で入院を繰り返し、大正七年五月、智恵子の父長沼今朝吉の死、大正八年十一月、智恵子の妹千代(16歳)の死等の事件があったが、光太郎自身の精神生活は比較的平穩であった、と考えることができる。従って、光太郎が「感情」に発表した計七篇の詩は、光太郎の精神史において特に注目すべき内容は持っていない、ということが出来る。その中であえて注目すべき詩句を探せば、「我家」の末尾、「ああ、いつでも探してゐた魂の故郷／此の我家、此の我家」の二行である。光太郎はかつて、バーナードリリーチに献呈した「廃頽者より」(「詩歌」明44・7)において、自分がデカダンスに落ち入った理由を、「余に故郷なし」と、リーチに訴えている。今、ここで、光太郎は、「此の我家」こそ「魂の故郷」と歌いあげている。光太郎は、智恵子



と共棲し、彫刻に専念できる環境、「魂の故郷」をようやく得て、デカダンスを脱し得たのであり、パリ留学以来の鬱屈した思いを払拭し得て、特に詩を書く必然も無かったといえる。光太郎のその思いを確認し得るだけでもこの詩は重要な意味を持つものであり、『道程』から「雨にうたるるカテドラル」への光太郎の詩の空白期を埋めているという点でも、「感情」への発表詩は大切なものである。

光太郎と「感情」との関りは他に三点ある。一つは、朔太郎の詩集『月に吠える』に対しての祝辞、礼状を特集した第9号（大正六年四月）「詩集『月に吠える』に就て諸名家の言葉」のうちの一つ。「今までこんなに全体の抱和した芸術を日本でみたことのない気がします。私は詩について何事も公けに言はない時に居ますが後に詩の事について書く時、此の集が実に重要なものである事を感じます。」というもの。二つ目は第10号（大正六年五月）の山村暮鳥のアフォリズム「風想草語」に（高村光太郎氏におくる）という献辞のあること、第三は、第6号（大正六年一月）の「詩界消息」（犀星執筆）の一項に「高村光太郎の詩集 第二詩集で最近のものと新らしく書いたものとを併せて『人間苦』として今年初春までには本になる予定。この命題『人間苦』もまだ考へ中であると同氏は手紙で言つてゐられる。くわしくは二月号で発表する」とある。詩集『人間苦』は、周知のように結局実現しなかった。「感情」二月号での詳細の発表もなかった。

なお、「現代詩人号」の「消息」の末尾に、「又尾瀬哀歌氏佐々木好母氏の詩篇が印刷に間に合はなかつたことを作者に謝します」とあるが、この二人の作品が「感情」に発表されたことは、以後も、ない。

執筆メンバーの中でもう一つ注目すべきことは、三木露風、川路柳虹の二人が加わっていることである。朔太郎は、のちに、『感情』を出した頃（金星堂版『現代詩講座第四巻』、昭4・10）において、「僕等の一派『感情』派の特色は、何よりも詩語の平明素樸を尊び、できるだけ通俗の日用語を使用して、感情を率直に打ちまけて出すことであつた。したがつてこの詩風は、当時の一般的詩壇を代表してゐた三木露風氏等の難解晦渋の古典詩風と対蹠し、互に両立できない反目の関係に導かれた。当時三木露風氏を中心とし、柳沢健、富田碎花、川路柳虹、西条八十等の詩人を総括してゐた雑誌

があり、その一派の詩風を称して、詩壇は「象徴派」と名称してゐた。そこで我々の『感情』詩派は、当時の詩壇の専制的権威であつたこの所謂「象徴派」を相手に廻して、戦鬪を開かねばならなかつた。僕と室生君とは結束して、象徴派を相手に戦争した。」と、ある。

敵対意識を抱いている露風、柳虹らをも招待したのは、朔太郎に、それを超える、文壇への敵対意識があつたからであらう。「現代詩人号」の朔太郎執筆の「消息」は、「日本の詩は、いまがほんとの創造期である」として、日本語の問題をとりあげた後、

実さい私たちの責任は非常に重すぎる。そしてずいぶん苦しい立場に立つてゐるのだ。「どうしたら、ほんとの日本語の詩が生れるか」といふ未来の問題を解決するため今まで、私たちはてんで各のちがつた道から歩を進めてきた。そして今ではやつとお互に顔を見合せて勇気をつけあふところまでやつてきた。

この一冊の詩集にあつまつた人たちは、てんでに自分たちの苦しんできた道から、自分たちの発見を説明してゐる。その発見は貴重なものである。

日本の文芸界には、われわれ詩人のやつてゐる仕事を、鼻の先で軽蔑してゐる人がある。そういう無定見の人たちのまへで、我我一同はごうまんに踏んばつてやりたい我我のからだの重みで、そういふ木つ葉文士共をふみつぶしてやりたいのだ。

と、今後の仕事への責任と抱負と共に文壇への敵対意識を露骨に示している。朔太郎はここで詩壇の大同団結を考えているわけであるが、これは、いくたびかの曲折を経て、大正六年十一月の詩話会の結成となり、大正六年十一月の「日本詩人」の創刊へと展開してゆくことになるのである。

なお、朔太郎は、前出の『感情』を出した頃においても、その冒頭に、

僕等が詩壇に出た当時は、自然主義によつて文壇の風潮が支配されてゐた。ところでこの自然主義の文学論は、そ

のレアリズムと写実主義の立場からして、極度に詩を排斥し、且つ文学に於ける詩的精神そのものを賤辱した。おそらく日本の文壇で、詩がこれほどにひどく虐遇され、不遇に軽蔑された時代は無かつたらう。そして僕等は、丁度その「最悪の時」に出たのである。

と、文壇の詩に対する「虐遇」に対して憤懣をぶちまけている。

(付記) (1) 萩原朔太郎の書簡の引用は、筑摩書房版『萩原朔太郎全集』第十三卷(昭52・2)によつた。書簡に付した

・印は、同書における印で、「原文のママ」の意である。

(2) 校正中に、『新しい詩とその作り方』について犀星の次の言及に気づいたので書きとめておきたい。

「感情」の初号からずつと送りつづけていた金沢の女の人のあいだに結婚の話がおこりはじめた。顔も知らないのにそんな話を持ち上つた。話が急転して翌年二月に兄の家で結婚して、おなじ百姓家の別棟をかりて私達は世帯というものを持つた。まるで、電光的に生活が變つた。多田不二に手伝つてもらい「新しい詩とその作り方」という、ばかばかしく悲しい原稿を二百枚ほど書いて、文武堂から出版してたしか六十円ほど収入を得た。

「自叙伝」(『憑かれたひと』昭47・7、冬樹社)の一節であるが、この書き方に従えば結婚後の執筆となり、「感情」の関係記事から大きくずれている。